

雪蓬慧明の活動とその功績

—『五燈会元』編纂刊行の陰に隠れて—

佐藤 秀 孝

はじめに

南宋末期の江南禅林にあつて臨済宗松源派の滅翁文礼（天目樵者、一一六七—一二五〇）の法を嗣いだ門人でありながら、世に正当な評価を受けていない禅者として雪蓬慧明（雪蓬とも、友雲、一二二六—？）という人が存している。この人は実は禅宗燈史の一つとして名高い『五燈会元』二〇巻を自ら陣頭に立つて編集刊行したとされる禅者であり、『禅籍志』巻上「宗門全史類」の「五燈会元」の項によれば、法諱が慧明または恵明とされ、ほかに字を友雲、道号を雪蓬と称している。『五燈会元』といえは、一般に大慧派の大川普濟（一一七九—一二五三）によつてまとめられた燈史として知られるが、後に詳しく触れるごとく、実際に編集を一手に担つたのは慧明であつたといつてよい。『禅籍志』によれば、慧明は滅翁文礼に参じて法を嗣いでおり、松源崇嶽（贖翁、一一三二—一二〇二）の法孫に名を連ねたとされる。

なお、慧明については『正誤仏祖正伝宗派図』四に「天童滅翁文礼（天目樵者）」の法嗣として「雪蓬慧明（編『五燈会元』）」と記されており、やはり文礼の法嗣に挙げられている。おそらく慧明は同じ杭州臨安県の天目山付近の出身であつた文礼を慕つてその門に投じ、坐禅辦道の末に法を嗣いでいるものであろう。

一方、江戸中期に大応派（妙心寺派）の無著道忠（照氷堂、一六五三—一七四四）は『虚堂和尚語録犁耕』（以下、単に『虚堂録犁耕』と略称）巻三〇「行状」の「嗣法十数人」の項において、『正誤宗派図』四の記載を挙げ、同じ松源派の虚堂智愚（息耕叟、一一八五—一二六九）の嗣法門人二〇人を列記した後、『虚堂和尚語録』の古い註釈書（旧解）に基づくとして、さらに四禅者を加えて「天寧雪蓬慧明」を智愚の法嗣の一員に加えている。ただ、慧明は智愚のもとに久しく

参学しているが、実際にはその法を嗣いでおらず、同じ松源派の文礼の法嗣に名を連ねたのが事実であるらしい。しかしながら、この人は晩年の智愚との関わりにおいて、きわめて興味深い事跡を多く残していることから、諸史料を通してその足跡を整理することはそれなりに意義が存するであろう。

いま、慧明に関する略系譜として大川普済・滅翁文礼・虚堂智愚の三禅者の系統を示すならば、

圓悟克勤——虎丘紹隆——応庵曇華——密庵咸傑——松源崇嶽——滅翁文礼——雪蓬慧明
運庵普巖——虚堂智愚

大慧宗杲——拙庵徳光——浙翁如琰——大川普済

ということになり、普済は同じ楊岐派ながら大慧派の流れであつて、慧明とは系統的に若干の開きが存しており、智愚と慧明は虎丘派下で同じ松源派に属し、法系上の従兄弟の關係に当たつている。

また後に触れるごとく、慧明は日本に渡来した破庵派（仏光派祖）の無学祖元（子元、仏光国師、一二二六—一二八六）と奇しくも同じ宝慶二年（一二二六）の生まれであつたことが判明する。一方、智愚の法を嗣いだ南浦紹明（田通大応国師、一二三五—一三〇八）が日本に帰る際、南宋の諸禅者が寄せた偈頌集『一帆風』の冒頭にも慧明は序文を寄せている。慧明は『五燈会元』の編集を契機としてか、鎌倉期の日本禅林とも因縁浅からぬものが存している。

このように慧明は目立たぬながら南宋最末期の江南禅林に興味深い活動を続けていたのであり、その事跡を丹念に調べ上げることによつて、禅宗史上に隠された新たな事実を多少なりとも解明してみることにはしたい。

『禅籍志』に載る雪蓬慧明

本稿で問題とする雪蓬慧明については、残念ながら中国の禅宗燈史には章が存していないばかりか、その名すら載せられていない。そんな慧明の世に忘れ去られたかのごとき功績は、奇しくも正徳六年（一七一六）に泉南すなわち和泉（大阪府）南部の仏在庵に居住した大応派（大徳寺派か）の聖僕義諦（妙諦とも、南外史）によつて編集刊行された『禅籍志』巻上「宗門全史類」の「五燈会元」の項に、

宋季、靈隠大川普済禅師、明州奉化人、得二浙翁如琰之印一、唱二大慧四世之法一。曾以二五燈一、会為二一書一、号二五燈会元一。及三胡元滅二南宋一、其板燬矣。会稽莊節韓氏、同二大尉康里一、重為刻成、請二中竺用章俊公一做レ序（俊嗣二笑隠一、訶二大慧雲孫一）。

日本叢林、自_レ古伝、濟大川住_二靈隱_一時、有_二侍者慧明者_一、博涉_二經史_一、以_レ文自負。一日語_二諸道友_一曰、視_二五燈之作_一、筆削不_レ精、吾將_下補_上綴罅漏、刪_二除冗長_一、以著_中一書。公等其_レ力乎。諸友皆諾。時虛堂愚和尚未_二出世_一、偶在_二靈隱_一、謂_二明侍者_一曰、夫燈錄之書、皆從上宿徳之撰也、公以_二妙齡_一欲_二自任_一、寧非_二僭越_一哉。請納_二長者之言_一、且緩緩去。明不_レ從_レ焉、遂造_二斯五燈會元三十卷_一。余以為、明雖_レ是_二虛堂諫_一、伎痒禁不_レ得、遂滿_二其志_一。而不_二自幸_一、請_二大川_一為_二撰者_一也。不_レ然、何有_二大川之名_一乎。明字友雲、号_二雪蓬_一、後嗣_二礼滅翁_一、為_二松源法孫_一。

と載ることで、辛うじてその事跡が日本禅林に伝わる伝承として世に残されている。⁽¹⁾ 本論考はこの僅かな記事を拠り所として展開することから、後段の慧明に関わる箇所を書き下してみることにしたい。

日本の叢林に、古より伝う、濟大川、靈隱に住する時、侍者慧明という者有り、博く經史に涉り、文を以て自負す。一日、諸の道友に語りて曰く、「五燈の作を視るに、筆削精しからず、吾れ將に罅漏を補綴し、冗長を削除し、以て一書を著さんとす。公等、其れ力を_レ割せんや」と。諸友皆な諾す。時に虚堂愚和尚、未だ出世せず、偶たま靈隱に在り、明侍者に謂いて曰く、「夫れ燈錄の書は、皆な従上宿徳の撰なり。公、妙齡を以て自ら任ぜんと欲す、寧んぞ僭越に非ざらんや。請う、長者の言を納れ、且らく緩緩にし去れ」と。明、焉れに従わず、遂に斯の五燈會元三十卷を造る。余、以為らく、「明は虚堂の諫めを是とすと雖も、伎痒、禁じ得ず、遂に其の志しを満たす。而して自ら幸とならず、大川を請して撰者と為すなり。然らざれば、何ぞ大川の名有らんや」と。明、字は友雲、雪蓬と号し、後に礼滅翁に嗣ぎ、松源の法孫と為る。

江戸期に著されたこの記事が果たしてどこまで史実を伝えているのかは問題もあるが、諸史料を領覽すると、南宋末期に雪蓬慧明という禅者が存したことは疑いなく、しかも宋版『五燈會元』の序文には実際に慧明という禅者が活躍した様子が記されている。こうした点を踏まえると、慧明と『五燈會元』をめぐる伝承はそれなりに根拠を有する記事であろうと見られる。以下、この『禅籍志』の「五燈會元」の項に語られる記載を逐一に考察し、内容の検討を試みることにしたい。また『五燈會元』を編集した後、慧明が如何なる活動をなして世を終えたのか、限られた史料を通して雪蓬慧明という禅者の事跡を窺ってみることにしたい。

出身地と生年

はじめに問題とすべきは慧明の法諱と道号・字および出身地についてであろう。『禅籍志』によれば「明、字は友雲、

雪蓬と号す」と記されており、慧明は字を友雲、道号を雪蓬と称したと伝えている。東京都世田谷区上野毛の五島美術館に付置される大東急記念文庫には北朝の永徳二年（南朝の弘和二年、一三八二）に刊行された『仏祖正伝宗派図』が所蔵されているが、そこには「徑山虚堂智愚」の法嗣として「天寧雪蓬慧明」の名が存している。また愛知県一宮市の長島山妙興寺に所蔵される南北朝後期の『仏祖宗派之図』においても「虚堂愚禪師」の法嗣の一人として「雪蓬明禪師」の名が載せられている。これに対し、江戸初期の寛文八年（一六六八）に刊行された『正誤宗派図』四では「天童滅翁文礼（天目樵者）」の法嗣の一人として「雪蓬慧明（編五灯会元）」と記されている。これらによれば、慧明の嗣法問題は別に論ずるとして、この人は道号を雪蓬または雪篷と称し、法諱が慧明であったことが知られる。この人の道号が草の蓬なのか、舟の篷（芭）なのかは判断に苦しむが、同じ発想の禪者として曹洞宗宏智派の短篷□遠（短蓬とも、遠鉄概、？—一二四七）が存している。また詳しくは後に触れるが、『虚堂和尚語録』によれば、法諱に関しては慧明のほかに恵明と記している場合も存している。

一方、『禅籍志』によれば、慧明は道号の雪蓬のほかに字を友雲と称していたとされるが、この点についても後に詳しく触れるごとく松源派の石林行輩（一一二〇—一一八〇）がその語録である『石林和尚語録』巻上「臨安府浄慈報恩光孝禅寺語録」において「謝北院・友雲西堂上堂」という上堂をなしている。また松源派の沢山式咸は元代中期に『禅林備用清規』を編集しているが、その自序において「友雲明西堂出所蔵抄本」と述べている。ここにいう友雲西堂ないし友雲明西堂とはまさに慧明のことにほかならず、友雲の字でも通称されていたことが確かめられる。

つぎに慧明の出身地について若干の考察をなしておきたい。破庵派（無準下）の無学祖元の『仏光国師語録』巻九「跋」に「送雲溪歌（并序諸老題跋附）」が収められているが、その中で慧明が題跋を寄せて、

客館諸友玉立、燭花映紅。（缺）観子元之言、麗而有則、豈特砥礪交道。至如屈宋班馬、弘雲之壘、若摩撫而入、人見而畏之。噫、子元与余同年、何其可畏之多耶。 若溪慧明。

と記しており、自ら署名として「若溪慧明」と表記していることに注目したい。「送雲溪歌」とは祖元が法友である嗣承未詳の雲溪という禅者を送るために詠じた詩歌であり、これに諸禅者が題跋を寄せて長編の詩軸となし、その中に若溪の慧明も題跋を書き記している。ここに若溪の慧明とあるのが、実は本稿で問題とする慧明その人のことにほかならない。おそらく実際の「送雲溪歌」の詩軸には「若溪慧明」の自署の後に落款が押されていたものと見られ、そ

こには「雪蓬」や「慧明」の印が存したことであろう。慧明は自らの出身地の河川の名を取って「苕溪」と号しているわけであり、苕溪が慧明の出身地に由来していることが判明する。苕溪とは杭州（浙江省）餘杭県内に存する苕溪のことを指しており、慧明は杭州出身の浙僧であるが、その俗姓については定かでない。また慧明は別号を友雲と称したことが知られているが、これは行雲流水を友として行脚する修行僧（雲水）のありように因むものである。

つぎに問題とすべきは慧明の生年であり、この点に関しても幸いに知る術が存している。先に示した「送雲溪歌」の題跋の中で慧明は自ら「噫、子元は余と年を同じくす。何ぞ其れ畏るべきの多きや」と述べていることから、慧明と子元すなわち無学祖元とは同年齢で常に相手の存在を意識し合う間柄であったらしいことが窺われる。『仏光国師語録』巻九に付される松源派（虚堂下）の靈石如芝（仏鑑禪師、一二四六―？）が状した「無学禪師行状」によれば、

師諱祖元、字子元、号無学。生於宋之宝慶丙戌。家慶元鄞邑、俗姓許。

とあり、祖元が宝慶二年（一二二六）に出生したことが明記されているから、これに従えば慧明も同じ宝慶二年の生まれであったことになろう。

滅翁文礼への参学

ところで、『禅籍志』によれば「後嗣礼滅翁、為松源法孫」とあるから、慧明は松源派の滅翁文礼に参じて法を嗣いだことが知られる。『正誤宗派図』四においても「天童滅翁文礼（天目樵者）」の法嗣として「雪蓬慧明（編五灯会元）」と記されているから、江戸期の禅籍資料や宗派図では慧明は一般に文礼の法を嗣いだ高弟と見られている。

幸いにも文礼については『天童寺志』巻七「塔像攷」の「天目礼禅師舍利塔」の箇所⁴に、門人と見られる天台徳雲が状した「天目禅師行状」が伝えられている。文礼は慧明の本師と目される禅者であることから、いま、その全文を示すならば、およそつぎのようなものである。

天目禅師行状。

師諱文礼。号滅翁。杭之臨安人。姓阮氏。家在^二天目山之麓、因号云。主^三京城之広寿、永嘉之能仁、安吉之福泉、行都之浄慈、四明之天童。帛終^二于梁渚西丘焉。嬰^三微恙、説^レ偈脱去。茶毘不^レ壞者^二、頂骨齒舍利如^二燦珠、瘞^三天童応菴塔之東。寿八十四、臘六十八。淳祐十年十月十日卒也。師生^二于乾道丁亥。六歳携^レ籃随^レ母採^レ桑、俄而窮念^二携^レ之者誰、始

有_二出家志_一。入_レ塾_二絃誦_一、度_二越他童子_一。十六依_二郷之真相寺智月_一剃落。走_二淨慈_一、參_二混源密_一。源拳_二現成公案放_一汝三十棒話、不_レ契。謁_二育王弘照光_一。照問、恁麼來者、那箇是汝主人公。師豁然領_二旨_一。他日弘照再問、是風動、是旛動、這僧如何。師云、物見主眼卓豎。又問、不_二是風動_一、不_二是旛動_一、甚処見_二祖師_一。師云、揭_二却腦蓋_一。照然_レ之。松源嶽、唱_二応菴之道于饒之薦福_一、室中間_レ僧、不_二是風動_一、不_二是旛動_一。擬議即棒出。師聞_レ之、頓忘_二知解_一。又聞_二餞_一僧偈云、天童弘法龍掃_レ水、玉几叢林虎靠_レ山、賺_二了幾人_一深著_レ脚、遠烟浪裏白雲間。師志_二大愜_一、乃參趨焉。松源曰、何舍_レ光而來。師因_二道所_一以然、俾_二左右得_レ尽_二其旨_一。辭_二松源_一、巡_二礼江淮_一、問_二祖塔_一。暨_二還_レ浙、謁_二塗毒于径山_一、遯菴于華藏、葦堂于瑞巖、無用于天童。得_二松源家法_一、則為_二其嗣_一焉。有_二學問_一尤通_レ易、乾淳諸儒、大闡_二道學_一、朱晦菴起、二程_一、楊慈湖起、象山皆少進_二浮囡氏_一。師与_レ之遊、直示_二以心法_一、不_レ下_二為_二世語_一。徇悅_レ也。晦菴問母_レ不_レ敬。師又手示_レ之。慈湖問、不_レ欺_レ之力。師答以_レ偈曰、此力分明在_レ不_レ欺、不_レ欺能有_二幾人_一知、要_レ明_二象兔全提句_一、看_二取陞_一階正_レ笏時_一。其曉_レ人類如_レ此。師所_レ閱五利、不_レ過_二三十年_一。而得_二間之歲月_一、多道_二遙于梁渚之西丘_一、羣衲參叩、無_レ異_二領_一衆時_一也。其為人高古簡儉、不_レ苟_二為_二笑語_一。又不_レ俯徇_レ物情傷_レ。今衲子習_二拳謁脆_一、豈寤_レ為_レ嫌_レ己_一。至_レ呈_二露見解_一、則敲扑_二不_二少假借_一、孰知_レ為_レ教哉。以_レ故多抵牾落落、愈不_レ与_レ世、偶而徒也。始合而終睽_レ之矣。於戲、師固未_レ易_レ知也。豈假_レ人為_レ重也哉。既哀刊_二禪語_一為_二一集_一、他著述又別哀焉。謹撰次如_レ右。謹狀。

文礼は道号を滅翁といい、杭州臨安県の阮氏の出身とされ、実家が臨安県の天目山に近かったことから、別に地名に基づいて天目あるいは天目樵者とも称している。一六歳で出家剃髮して後、杭州錢塘県の南屏山淨慈報恩光孝寺寺で大慧派の混源曇密（一一二〇—一一八八）に參じ、明州鄞県の阿育王山広利禪寺において大慧派の拙庵徳光（仏照禪師、一一二二—一二〇三）に謁して契発している。やがて饒州（江西省）鄱陽県東の東湖薦福禪寺において松源崇嶽のもとに投じて大事を了畢しているが、その後も杭州餘杭県の径山興聖万寿禪寺に黄龍派の塗毒智策（一一七一—一九二）を訪ねるなど研鑽に努めている。文礼が初めて開堂出世したのは、杭州府城の広寿慧雲禪寺であり、広寿寺は法叔の破庵祖先（一一三六—一二二二）を開山としている。その後、文礼は温州（浙江省）永嘉県の北雁蕩山能仁禪寺、湖州（浙江省）安吉県の福泉禪寺を経て、杭州の淨慈寺さらに明州鄞県東六〇里の天童山景德禪寺へと陞住しているわけである。

慧明はすでに述べたごとく宝慶二年の生まれであり、文礼が淳祐一〇年（一二五〇）一〇月に示寂した時点でもわずかに二五歳にすぎないことから、文礼にとって慧明は最晩年に育成した子飼いの門人であったことになろう。文礼は晩年

を明州鄞県の天童山景德禪寺に化導を敷いており、天童山の住持を退いた後、杭州錢塘県の梁渚に隱閑して世を終えていることから、この間、慧明は文札に随侍して参学しつつづけていたものであろう。ただし、残念ながら、慧明が文札との間で交わした具体的な問答商量などは何も伝えられていない。文札には『天目禪師語録』が編集されたと伝えられるから、そこには慧明との関わりを記した何らかの記事が収められていたはずであろう。

靈隱寺の大川普濟への参学と『五燈会元』の編集

ところで問題なのは、慧明が『五燈会元』編集にかなり実質的な働きをなしていたらしい事実である。一般に『五燈会元』といえば、大慧派の大川普濟が杭州錢塘県の北山景德靈隱禪寺の住持として自ら陣頭に立つて編纂したものとくに解されている。普濟は明州奉化県の張氏の出身で、大慧派の浙翁如琰（仏心禪師、一一五一—一二二五）の法を嗣いでおり、浙江の地の諸禪刹に住持して後、杭州錢塘県の南屏山淨慈報恩光孝禪寺を経て同じ錢塘県の靈隱寺に遷住している。『物初贖語』卷三四「大川禪師行状」や『大川和尚語録』「住臨安府景德靈隱禪寺語録」の配列などから推測すると、松源派の石溪心月（仏海禪師、一一七七—一二五六）が靈隱寺から徑山に勅住した淳祐一〇年（一二五〇）頃に、普濟は心月の後席を継ぐかたちで靈隱寺に勅住しているものと見られる。晩年、普濟は疾病により思うような接化をなし得なかったものらしく、宝祐元年（一二五三）正月一八日に世寿七五歳で示寂している。『五燈会元』が編集刊行されたのは宝祐元年一月のことであり、まさに普濟が示寂した年月に当たっているが、『大川和尚語録』や『大川禪師行状』には『五燈会元』編集のことは一切記されていない。

すでに取り上げたごとく『禅籍志』巻上の「五燈会元」の項には、

日本叢林、自_レ古伝、済大川住_レ靈隱_レ時、有_二侍者慧明者、博涉_二經史、以_レ文自負。一日語_二諸道友、曰、視_二五燈之作、筆削_レ不_レ精、吾將_レ補_二綴罅漏、刪_二除冗長、以_著一書_上。公等其_レ剽_レ力乎。諸友皆諾。時虛堂愚和尚未_二出世、偶在_二靈隱、謂_二明侍者_レ曰、夫燈錄之書、皆從上宿徳之撰也、公以_二妙齡_レ欲_レ自任、寧非_二僭越_レ哉。請納_二長者之言、且緩緩去。明不_レ從_レ焉。遂造_二斯五燈会元三十卷_一。余以為、明雖_レ是_二虛堂諫、伎痒禁_レ不_レ得、遂滿_二其志_一。而不_二自宰、請大川_レ為_二撰者_一也。不然、何有_二大川之名_一乎。明字友雲、号_二雪蓬、後嗣_二礼滅翁、為_二松源法孫_一。

という日本禅林に伝わる興味深い伝承を載せている。『五燈会元』といえば、一般に大川普濟が編集した禅宗燈史とし

て知られているが、ここでは普濟ではなく慧明をもって実際の編集者と伝えている。そこでこの『禪籍志』に古くより伝えられている逸話に語られるところを逐一に考察してみることにした^①。

普濟が靈隱寺に住持していた時期、その席下で侍者を勤めていたのが慧明であり、慧明は博く経史に通じ、文才にかなりの自負を持っていたとされる。あるとき多くの道友を集めて「五燈の作を視るに、筆削精しからず、吾れ將に罽漏を補綴し、冗長を削除し、以て一書を著さん。公等、其れ力を劔せんや」と述べ、『景德伝燈録』『天聖広燈録』『建中靖国統燈録』『宗門聯燈会要』『嘉泰普燈録』の五燈を再編成して一書を著したい旨を告げ、『五燈会元』を編集するという事業を企てたとされる。おそらく文札が示寂した後、慧明は明州の天童山か杭州の梁渚を離れて郷里に近い杭州銭塘県の靈隱寺に掛搭して侍者として普濟に師事したものである。慧明のこの五燈を一書にしたいという企画に道友たちも賛同し、慧明を陣頭に仰いで靈隱寺で『五燈会元』の編纂が進められていったものらしい。

実際、『五燈会元』は五燈の宜しきを集めた最良の書という意味であり、浩博な五燈を一書に為して観覧に便ならしむることに編集刊行の意図が存している。したがって、実地の資料収集に悪戦苦闘した五燈の編集に比べれば、かなり容易に短期間に編集することが可能であったはずである。『五燈会元』の特徴を列記するなら、左記のごとくなる。

- ① 記事内容の重複を避けた五燈の再編集である。
 - ② 五家七宗を初めて禅宗燈史として明確に分類し、見易く配列している。
 - ③ 青原下・南嶽下いずれにも片寄らず、滄仰宗・法眼宗・臨濟宗・曹洞宗・雲門宗・黄龍派・楊岐派と歴史的な発展盛衰を考慮して並べ、一宗一派に拘っていない。
 - ④ 五燈の中で系譜を異にする場合、妥当な方を取り、また主な伝燈の本流を直系として順序を改めている。とくに従来のまま雲門宗・法眼宗の直系である天皇道悟を石頭希遷の門下として置きながら、割注して馬祖道一の門下とする問題を提起している。
 - ⑤ 伝記面の記載を簡略化し、祖師の機縁や上堂語句に力点を置いている。
 - ⑥ 五燈に比して内容に増補と削減が見られ、禅林でしだいに改変増補されていく祖師の機縁・公案の問題が想起される。
 - ⑦ 後世の禅宗燈史に絶大な影響を与え、それらの基本的なかたちを決定的にしている。
- およそ以上のようなようであるが、つぎに『五燈会元』に記される最下限の祖師に注目してみよう。『嘉泰普燈録』に章が

なくて『五燈会元』卷二〇「慶元府育王仏照徳光禪師」の章に記される大慧下の拙庵徳光（東庵、仏照禪師、一一二二—一一〇三）の上堂語句はすべて『宗門聯燈会要』と同一であり、ことさら新添されていない。しかるに同じ大慧下として遼庵宗演と無用浄全（翁大木、一一三七—一二〇七）に関しては『嘉泰普燈録』『宗門聯燈会要』に章がないのに、新たに『五燈会元』卷二〇に「常州華嚴遼庵宗演禪師」の章と「慶元府天童無用浄全禪師」の章が編入されている。また卷二〇「慶元府天童密庵咸傑禪師」の章では虎丘派の密庵咸傑（一一八一—一一八六）に関して増補が著しく、卷一四「杭州浄慈自得慧暉禪師」の章でも曹洞宗宏智派の自得慧暉（一一〇九七—一一八三）に関して増補が多い。これはある意味で編者の慧明の意向と表裏をなすはずである。

慧明が『五燈会元』編集を企てた際、靈隠寺山内の松源崇嶽の塔頭である鷲峰庵に閑居していた虚堂智愚が慧明の妙齡なさまを見て「夫れ燈録の書は、皆な従上宿徳の撰なり。公、妙齡を以て自ら任ぜんと欲す、寧んぞ僭越に非ざらんや。請う、長者の言を納れて、且緩緩にし去れ」と忠告したと伝えられる。古来、禪宗燈史はみな禪門の宿徳によつて編纂されているが、慧明の場合、いまだ年齢も若く僭越であると指摘し、年長者のことばを聞き入れて逸るものではないと智愚は諫めている。しかしながら、慧明は智愚の忠告に従わず、ついに『五燈会元』を編集し終えたと伝えている。しかも『禪籍志』の編者である聖僕義諦は「余、以為らく、明は虚堂の諫めを是とすと雖も、伎痒をば禁じ得ず、遂に其の志しを満たす。而して自ら宰とならず、大川を請して撰者と為すなり。然らざれば、何ぞ大川の名有らんや」と述べており、慧明が智愚の諫めをあえて斥けてその志しを遂げたものの、自ら編集の主宰者とはならず、靈隠寺住持の普済を請して『五燈会元』の撰者に祭り上げたのだと解している。

この『禪籍志』の伝承がかなり信憑性の高いものであることは、智愚が法祖松源崇嶽の塔頭である鷲峰庵（松源塔下）に閑居していたのが『五燈会元』編集刊行の時期と重なっていることであり、智愚は婺州（浙江省）義烏県南二五里の雲黄山宝林禪寺（双林寺）を退居した淳祐九年（一二四九）頃から宝祐四年（一二五六）四月七日に明州鄞県の阿育王山広利禪寺の請を受けるまで、実に足掛け八年にわたつて靈隠寺の鷲嶺庵に隠棲閑居している。

ところで、普済は実際に宋版ないし覆宋版（五山版）の『五燈会元』に対して巻頭に序文（題詞）を寄せており、

世尊拈花、如_二蟲禦_レ木、迦葉微笑、偶尔成_レ文。累_二他後代兒孫、一一聯芳統焰。大居士就_レ文挑剔、亘_二千古_レ光明燦爛。

淳祐壬子冬、住山普済、書_二于直指堂_一。「普済」「大川」

と書き記している。この普済の序は淳祐壬子の冬すなわち淳祐一二年（一二五二）の冬に靈隠寺の直指堂（方丈）において揮毫されたものである。⁹「大川禪師行狀」によれば、普済は宝祐元年（一二五三）正月八日に示寂しているから、この序文が著されたのはまさに示寂する直前ということになる。普済の序には慧明のことは記されていないが、大居士とは後に述べる沈浄明のことを指しており、沈浄明は慧明と共に『五燈会元』の刊行に尽力した在俗の徒である。同じく宋版（覆宋版）の『五燈会元』の冒頭には、宝祐元年（一二五三）三月清明の日王楠（通庵居士）が記した序が載せられている。¹⁰いま、その序の全文を示すならば、

予聞、孔聖曰、參乎、吾道一以貫之。曾子曰、唯。子出、門人問曰、夫子之道、忠恕而已矣。又聞、釈迦在靈山拈花、迦葉微笑。世尊曰、吾有正法眼藏涅槃妙心、付囑摩訶大迦葉。一者用処不同、義則一也。由此觀之、一貫之理、以心伝心、千万載間、絲絲不絶。其道学宗派、蓋自曾子一唯中一来。仏法昭明、歴幾千劫、闡揚宗風、源源相繼。其教外別伝、蓋自迦葉微笑中一始。烏可岐而二哉。自景德中一有伝燈録行于世、繼而有広燈・聯燈・統燈・普燈。燈燈相統、派別枝分、同歸一揆。是知燈者、破愚暗以明斯道。今慧明首座、萃五燈為一集、名曰五燈会元、便於觀覽。沈居士捐財鳩工、鍔梓於靈隠山、実大川老・盧都寺贊成之。帙成、保庵携一部来、再三懇予為序。予曰、一大藏経如拭不浄紙上。由此知、仏法不在文字上、不向言語中。若是大丈夫漢、見得明、悟得徹、如俊鷄揚禽、提得便去。若廻頭側腦、稍涉遲疑、則空過新羅一矣。至如尋章摘句、徒增口鼓、打纏葛藤、料掉了無交涉、又豈可與語此集哉。雖然、其初地二乗、繙閲中或恐一言一句築著磕著、則与歷代祖師・天下老和尚一把手共行、使斯集大播無窮一矣。

皆宝祐改元清明日、通庵王楠 謹序。 [楠]「琅邪通庵」

というものであり、王楠（字は琅邪か）は普済が示寂して二ヶ月余を経た宝祐元年の清明すなわち春分から一五日後に序を書いていることが知られる。慧明自身の序跋は残念ながら存していないが、王楠は序の中で慧明に関して、

今、慧明首座、五燈を萃めて一集と為し、名づけて五燈会元と曰い、観覽するに便たり。沈居士、財を捐てて工を鳩め、梓を靈隠山に鍔し、実は大川老・盧都寺、之れに賛成す。

という注目すべき記載を残している。王楠の序文によれば、慧明という首座が靈隠寺での事業として五燈を集めて一書となし、これを『五燈会元』と命名して観覽に便をなしたというのである。王楠の序によれば、慧明が編集した『五燈

会元』に対し、沈浄明が財を投じて職工を集め、靈隱山（武林）で版木に刻み、住持の大川普濟と都寺の□盧がこの事業に賛同したことが伝えられている。賛成するとは助けて物事を完成させる意であり、また他人の考えに同意することであるから、あくまで『五燈会元』の発案者は慧明であり、強力な後ろ盾が沈浄明であったことが知られ、普濟は盧都寺とともに傍らから援助したということになる。また王楠の序に「帙成りて、保庵、一部を携え来り、再三、予に序を為さんことを懇む」とあるから、本文の出来上がった『五燈会元』一部を携えて保庵という禅者が親しく王楠のもとを訪ねて再三にわたって序を請うたことが知られる。保庵というのは道号であって、法諱については定かでないが、おそらく保庵は慧明の志しに賛同してともに『五燈会元』の編集に関わった禅者であろう。

ちなみに王楠の序文では慧明の肩書きが首座とあるから、おそらく『五燈会元』の編纂を企てた頃には侍者の職位であつたものが、王楠が『五燈会元』に序文を寄せた宝祐元年三月の頃には首座として靈隱寺山内に重きをなしていたものである。当時、靈隱寺の住持であつたのは普濟の後席を継いだ曹洞宗宏智派の東谷妙光（？—一二五三）であり、蘇州呉県の万寿報恩光孝禅寺より陞住している。慧明が首座に就いたのは時期的に妙光が靈隱寺の住持となつた直後ではないかと見られ、修行僧七〇〇人あまりを統括する第一座として半座を分かつていたことになる。

一方、沈浄明らの捨財によって慧明が編集した『五燈会元』は靈隱寺において版に興され、住持の大川普濟と都寺の□盧という禅者がその事業を傍らで賛助したと伝えられていることから、普濟はあくまで住持として『五燈会元』の編集刊行を見守る立場であつて、実際の編集や刊行にはほとんど参画することはなかつたものと推測される。晩年の普濟は病いによる闘病生活をなしており、自ら陣頭に立つて『五燈会元』の作製を指揮することはできなかつたはずである。

宋版（覆宋版）の『五燈会元』によれば、普濟が示寂する直前に沈浄明が跋文を撰しており、

安吉州武康県崇仁鄉禹山里、正信弟子沈浄明、幸生中国、忝預人倫、涉世多艱、幼失怙恃、季将知命、遂閱華嚴大經、伝燈諸録、深信此道不從外得。切見禅宗語要、具在五燈。卷帙浩繁、頗難兼閱。謹就景德靈隱禅寺、命諸禅人、集成一書、名曰五燈会元、以便觀覽。爰竭己資、及募同志、選工刻梓、用広流通、統如来慧命、闡列祖円機、燈燈相伝、光明不断。普願若僧若俗、或見或聞、開悟本心、咸躋覺地、出生功德。謹用祝延聖寿、保国安民。次冀施財助力、共獲休祥、普報四恩、用資三有。劫石有尽、我願無窮。

宝祐元年正月旦日、沈浄明、謹題。

という内容となっている。沈浄明は安吉州（湖州）武康県崇仁郷禺山里の人で、幼くして父母を失ってより仏門に近づき、『華嚴經』や禅宗の燈史・語録に触れて仏法に深く帰依した正信の俗弟子であったことが知られる。また沈浄明は五燈が分量が多くて煩雑であり、閲覽に便が悪いことから、靈隱寺で諸禪者に觀覽に便の良い一書を集成させて『五燈会元』と名づけたと述べている。とすれば、『五燈会元』編集を画策したのは沈浄明ということになり、この発案に対して陣頭に立つて実務に当たったのが慧明であったことになる。いわば慧明は靈隱寺に集った諸禪人たちの代表であり、沈浄明にとって実務を任ずるに足る頼もしき同志であったと見られる。

いま一つ普済と慧明との関わりを伝える史料として、松源派の沢山弑咸（一咸とも）が『禪林備用清規』に至大四年（一二三二）秋に書した自序において、

近者大川・笑翁二祖、唱道南北山、日用軌則、盛於當代。至元戊寅、依石林和尚於南屏、猶得見其遺風餘烈、及雲明西堂出所藏抄本、究心訪問、編集成帙、始此書之作、或以為僧受戒首之、或以住持入院首之。

と書き残している記事に注目しておきたい。これによれば、かつて大慧派の大川普済と笑翁妙堪（一一七七一—一二四八）が南北の両山すなわち錢塘県の北山景德靈隱寺と南屏山淨慈報恩光孝寺の両寺に化導を敷き、日用の軌則を当代に盛んにしたとされる。その後、元の至元一五年（南宋の祥興元年、一二七八）に弑咸が淨慈寺の石林行鞏のもとに参じた際、両者の頃の遺風が両寺になお残っており、このとき友雲明西堂すなわち淨慈寺の西堂であった慧明が自ら所蔵していた清規の抄本を弑咸に見せてくれたとされる。慧明の好意によって後に弑咸は『禪林備用清規』を編集することができたと自ら記しているわけであり、おそらくこのときの清規の抄本とは慧明が実際に靈隱寺の普済のもとに参随していた頃書き留めておいた清規の控えと見られ、慧明の抄本が『禪林備用清規』の基となっている点で注目される。

ところで、宋版『五燈会元』の版木が焼失し、元代末期に大慧派の業海子清（了清）が重刊本を出した際、至正二四年（一三六四）四月に大慧派の用章廷俊（懶庵、一二九一—一三六八）が杭州錢塘県の靈隱寺にほど近い中天竺天曆万寿永祚禪寺の住持として「重刊五燈会元一序」を寄せているが、廷俊は序の中で、

宋季靈隱大川禪師濟公、以五燈為書浩博學者罕能通究、迺集学徒、作五燈会元、以惠後学、恩至渥也。

と述べている。これによれば、靈隱寺の普済が自ら陣頭に立つて学徒を集めて『五燈会元』を編纂したとくに記されており、これが後に普済をもって編者に任ずる基になっているが、学徒の具体的な名は一人も載せられていない。重刊

本（元版）では宋版に存した三つの序が焼失のためかすべて削られており、すでに廷俊が活躍した元末明初には慧明の功績などは忘れ去られていたことなるうか。元代にはほかにも禅宗燈史として『祖燈録』や『至元心燈録』なども編集刊行されたものらしいが、いずれも残念ながら現今に伝えられていない。

もともと大刹の住持が自ら陣頭に立つて禅宗燈史を編集するのは稀であつて、晦翁悟明の『宗門聯燈会要』も雷庵正受の『嘉泰普燈録』も隠閑中になした編集したものである。いわんや、晩年に半身病いに伏しながらも、靈隱寺住持として多忙な毎日を送っていただろろう普濟に、『五燈会元』を編集するゆとりなどなかつたはずである。

無学祖元の「送雲溪歌」と慧明の題跋

では、『五燈会元』を編集刊行し終えて以降、慧明は如何なる活動をなしていたのであろうか。『扶桑五山記』一「靈隱住持位次」によれば、

卅七、大川濟禪師。卅八、東谷光禪師。卅九、偃溪開禪師。四十、荊叟珏禪師。

とあるから、普濟が宝祐元年一月に示寂した後、一月には後席を継いで曹洞宗宏智派の東谷妙光が入寺しており、年末一二月に妙光が示寂すると、宝祐二年（一二五四）には大慧派の偃溪広聞（仏智禪師、一一八九—一二六三）が陞住しており、宝祐四年（一二五六）の冬に杭州余杭県の径山興聖万寿禪寺に勅住するまで化導を敷いている。鷲峰庵の智慧は妙光に招かれて靈隱寺で「靈隱立僧普説」をなしている。慧明が引きつづき靈隱寺に止まっていたとすれば、宏智派の妙光に参随していたことになり、さらに妙光の示寂して後は大慧派の偃溪広聞のもとに止まっていたことなるうか。

ところで、『五燈会元』を編集した直後の慧明の消息を伝えるものとして『仏光国師語録』巻九「拾遺雜録」の「跋」に、破庵派（仏光派祖）の無学祖元（子元、仏光国師、一二二六—一二八六）が来日以前に記した「送雲溪歌（并序、諸老題跋附）」という頌軸の文面が載せられている。そこに題跋を寄せた老宿の一人として、

客館諸友玉立、燭花映_レ紅。（缺）
觀_二子元之言_一、麗而有_レ則、豈特_レ砥_二礪_一交道、至_レ如_二屈宋_一班馬。
弘雲之墨、若_二摩撫而入_一、人見而畏_レ之。噫、子元与_レ余同_レ年、何其可_レ畏之多耶。 茗溪慧明。

という慧明の作が載せられている。この跋は祖元（子元）が友人である嗣承未詳の雲溪（法諱は未詳）を見送った際の「送雲溪歌」に対して慧明が寄せたものであり、この題跋を付した年時は記されていない。しかしながら、慧明につづい

て天台県（浙江省）の出身である徳垢も跋を寄せて、

二交友「義如」金、諸公吐詞如「玉。余不敢贅、記「歲月」以附「行卷」。

時宝祐丙辰中秋日也。天台徳垢。

と記しているから、ほぼ同じ頃に撰されたものと見られる。ちなみに天台の徳垢とはおそらく無準下の断橋妙倫（松山子、一一〇一—一二六一）の法を嗣いだ古田徳屋（？—一二九二）のことであろうが、徳垢は宝祐四年（一二五六）中秋日すなわち八月一五日に跋を寄せているから、慧明も若干ながらこれに先んじて跋を記しているものと見られる。とりわけ、注目すべきは慧明が祖元について「噫、子元は余と年を同じくするに、何ぞ其れ畏るべきの多きや」と述べていることであり、これによれば、慧明は子元すなわち祖元と同年の生まれであったことが知られ、宝慶二年（一二二六）に出生していることが判明する。また慧明は同年の祖元をかなり意識し、つねにその力量に感心していたものらしい。とすれば、『五燈会元』を完成させた宝祐元年の時点で慧明はいまだ二八歳であったことになり、まさに『禪籍志』に言うごとく慧明が妙齡にして『五燈会元』の編纂を企てた消息が知られるのである。

ところで、『仏光国師語録』巻九「拾遺襍録」に載る守塔比丘光一編「告香普説」や、松源派の無象静照（法海禅師、一一三四—一一三〇六）が状した「仏光禅師行状」と、智愚の法嗣である靈石如芝（仏鑑禅師、一二四六—？）が状した「無学禅師行状」と、祖元の俗姪孫である曹洞宗宏智派の東陵永璵（妙応光国慧海慈濟禅師、一二八五—一三六五）が撰した「大日本国山城州万年山真如禅寺開山仏光無学禅師正脈塔院碑銘」などによれば、祖元は淳祐二年（一二五二）に靈隠寺の鷲峯庵（松源塔下）に到って隠閑中の智愚に参じ、秋には明州の天童山景德寺に赴いていることから、同年代の慧明と知り合ったのもこの頃と見られ、ともに智愚の接化に浴していたことになろう。

ところで、「送「雲溪」歌」の末尾に載る虞集（字は伯生、号は邵庵、一二七二—一三四八）の題跋によれば、その後しばらく「送「雲溪」歌」の頌軸は詩僧として名高い松源派の断江覚恩（以仁、文智老人、仏鏡文智禅師、？—一三三九）が所持していたことが知られる。虞集が題跋を付した後、おそらく元代末期に縁あつて祖元ゆかりの日本禅林へと将来されているものと見られ、辛うじてその内容が『仏光国師語録』に付記収録され、現今に文面のみが残されたわけである。

慧明の嗣法問題

慧明のことは残念ながら中国の禅宗燈史には章が存していないばかりか、名すら載せられていない。慧明自身は『五燈会元』を編集するという大業を果たしたにも拘らず、なぜか後世の禅宗燈史には顧みられることがなかったわけである。慧明は松源派の滅翁文礼の法を嗣いだと解するのが妥当であると見られるが、一に同じ松源派の虚堂智愚の法を嗣いだごとくにも受け取られている。文礼は智愚の師である運庵普巖(少瞻、?—一二二二、または一一五六—一二二六)と同門に当たるところから、慧明が文礼の法嗣とすれば、系統的に智愚にとつて慧明は法従弟であつたことになる。

愛知県一宮市の長島山妙興寺に所蔵される『仏祖宗派之図』は南北朝期に著わされたものであり、妙興寺開山の滅宗宗興(円光大照禪師、一三二〇—一三八二)を南浦紹明の法嗣に配することに意を配つた宗派図であるが、そこには「虚堂禪師」の法嗣として左から右にかけて、

南浦明禪師・靈石芝禪師・宝葉源禪師・閑極雲禪師・秋岩新禪師・升窓喜禪師・友堂会禪師・象先觀禪師・葛芦覃禪師・雪蓬明禪師・禹溪了禪師・東州俊禪師・晦叟光禪師・晋芝源禪師・潜溪広禪師・此軒足禪師・虚菴実禪師。

と智愚の法嗣一七人を挙げる中で「雪蓬明禪師」の名が第一〇番目に載せられている。また世田谷区五島美術館の大東急記念文庫に所蔵される北朝の永徳二年(一三八二)に刊行された『仏祖正伝宗派図』によれば「径山虚堂智愚」の法嗣として左から右にかけて、

建長南浦紹明・虚菴□実・平山本立・南明秋岩徳新・雲崑竹窓宗喜・慈源友堂禧会・資福象先可観・東山葛蘆浄覃・天寧雪蓬慧明・雪寶禹溪一了・万年東州惟俊・承天閑極法雲・仰山晦叟法光・報恩宝葉法源・報恩晋芝妙源・万寿潜溪妙広・翠崑此軒如足・浄慈靈石如芝。

という一八人の法嗣を挙げているが、その中にもやはり第九番目に「天寧雪蓬慧明」の名が存している。『仏祖宗派之図』と『仏祖正伝宗派図』ともに慧明の名は智愚の法嗣たちのほぼ中間に位置しており、秋岩徳新から東州惟俊までは同じ並びであることから、法系図の書き間違いということにはならない。これらによれば、慧明を智愚の法嗣とする説が早くから存したらしいことが知られ、当然のことながら両宗派図には文礼の法嗣に慧明の名は見られない。

これに対し、室町中期の応永二五年(一四一八)に夢窓派の古篆周印(無碍)が編した『仏祖宗派図』には、文礼の

法嗣にも智愚の法嗣にも慧明の名は載せられていない。一方、江戸中期の『正誤宗派図』四では「天童滅翁文礼（天目樵者）」の法嗣のひとりに「雪蓬慧明（編五灯会元）」と記されており、ここでは文礼の法嗣に慧明を挙げ、慧明の法嗣から慧明の名は削られている。

おそらく状況的には慧明は天童山の文礼に投じて参学随侍した後、霊隠寺の普済のもとに移り、この間、霊隠寺山内の鷲峰庵において智愚の接化にも浴する機会が存したものであろう。そのため後に嗣法に関して文礼の法を嗣いだ高弟とも、智愚の法を嗣いだ門人とも解されたものであろうか。この点、興味深いのは『虚堂和尚語録』巻七「偈頌」に、

衍・鞏・珙三禅德之「国清」。

誰知三隱寂寥中、因レ話尋レ盟別ニ鷲峯、相送当レ門有レ脩竹、為レ君葉葉起レ清風。

という作が伝えられていることであろう。この偈頌のみでは如何なる事情で詠じられた作なのかも定かでないが、祖元の『仏光国師語録』巻九「拾遺襍録」の「告香普説」に、

第二年、帰ニ靈鷲ニ作住。因到ニ鷲峯菴、参ニ請虚堂、聽ニ他説話、都無レ討頭処。這老子向レ我問、爾他年做ニ箇説禅長老。我自謂
 正要ニ説禅、如何嫌ニ我作ニ説禅長老。一夏二十来次到ニ菴中、動レ口便説ニ東山下事。我益不レ曉。有時牽レ今引レ古、千波万
 浪説レ之不レ了。見ニ我両眼瞠瞠地、又微笑。一日因做レ頌、送ニ鞏石林・衍氷谷・珙横川三人往ニ国清。他拈出示ニ老僧。頌云、
 因思三隱寂寥中、為愛尋レ盟別ニ鷲峯、相送当レ門有レ脩竹、為レ君葉葉起レ清風。老僧向ニ這老漢道、裏許都無ニ些子禅。老
 虚堂拈ニ起頌子、將ニ老僧ニ慕面一揮云、爾敢称ニ五山藏主、老漢一肚皮禅道。一斉打斷。当下知ニ他潜行密用処。日暮帰到ニ
 靈鷲。因看ニ雪竇拈ニ盤山公案、譬如ニ擲ニ劍揮ニ空、莫レ論ニ及与ニ不及、斯乃空輪無レ跡、劍刃無レ虧。又悟ニ仏仏祖祖灼然絶ニ
 文字相、従前滞著一時脱去。纔後帰ニ天童。

という記事が存していることから、その間の事情をかなり克明に窺うことができる。智愚の偈頌は三人の禅徳が台州（浙江省）天台県北一〇里の天台山国清寺（当時は景德国清禅寺）に赴くのに際し、彼らを豊干・寒山・拾得のいわゆる国清の三賢に準え、送別に与えた作である。ここにいう鞏と珙の二禅徳とは、文礼の高弟である石林行鞏（一一二〇—一二八〇）と横川如珙（此庵、一一二二—一二八九）の二禅徳のことであるが、最初に名が挙げられている衍禅徳も文礼の法を嗣いだ氷谷□衍（氷谷とも、？—一二六八）という禅者にほかならない。一に衍禅徳を智愚と同門に当たるとする石帆惟衍に当てる説も存するが、このとき惟衍はすでにかなりの年齢に達しており、惟衍と解するのは明らかな誤りである。

ここにいう「第二年」とは無準師範が径山で示寂した淳祐九年（一二四九）を第一年と見てその翌年すなわち文礼の示寂した淳祐一〇年の意味であろうか。三禅徳は天台山中の国清寺に赴くのに際し、杭州銭塘県の北山景德靈隱寺の鷲峰庵（松源塔下）に隠閑していた智愚を訪ねたものと見られ、このとき智愚は彼らに餞別として偈頌を揮毫して与えている。しかもこのとき祖元は「衍・鞏・珠三禅徳之・国清」の偈頌内容を題材に鷲峰庵の智愚と問答商量を交わしており、智愚の活作略によって句語三昧を悟ったとされている。

このように祖元は鷲峰庵の智愚に参学しているのであり、文礼の法嗣であった冰谷衍と行鞏と如珙の三禅者も同じ頃とともに連れ立って靈隱寺の鷲峰庵に智愚を訪ねているわけである。とすれば、同じ文礼の法嗣となった慧明が靈隱寺で侍者を勤める傍ら、この時期に鷲峰庵の智愚と関わることはそれほど不自然ではないであろう。

虚堂智愚への参随と澗山普光禅寺への出世

靈隱寺の鷲峰庵で智愚と知り合った慧明は、やがてその智愚に久しく随侍することになったものらしい。『虚堂和尚語録』卷一〇「法語」に、つぎのような慧明に与えた法語が伝えられている。

雪蓬明長老赴_レ禾興光孝_一。

雪蓬明老、相従有_レ日、自_二育王_一過_二東山_一、客櫛之下、温然如_レ春、此老之力也。在_二南屏_一居_二第一座_一、忽澗湖有_二公選之龍_一。二年復勝_二集于双径_一、仍掃_二第一座_一、羣心欽如。今領_二朝命_一、遐赴_二禾興光孝_一。臨_レ岐聊攄_二数語_一、以当_二祖行_一、卓_レ錘無_レ地、空餘_二双眼_一盖_二乾坤_一。鉄笛横吹、有_レ氣不_レ吞_二雲夢沢_一。煙波渺渺、蘭棹依依、雪蘆霜葦冷相宜、幾度揭開_レ閑对_二月_一。駕湖深处、不_レ必垂_レ絲、長水江頭、錦鱗自得。臨_レ岐句子、如何分付。風飄飄兮吹_レ衣、水泠泠兮声_レ詩。

咸淳戊辰秋九月、虚堂老僧書_二于不動軒_一、是年八十四。

この「雪蓬明長老赴_二禾興光孝_一」の法語は咸淳四年（一二六八）九月に晩年を迎えた智愚が杭州餘杭県の径山興聖万寿禅寺の住持として不動軒にて慧明に書き与えたものであり、不動軒とは径山の伽藍の一角に存した住持の方丈にほかならない。その内容は慧明が辿った軌跡をかなり具体的に伝えていることから、はじめに全文を書き下しておきたい。

雪蓬明長老、禾興の光孝に赴く。

雪蓬明老、相い従いて日有り、育王より東山に過ぎるまで、客櫛の下、温然として春の如きは、此の老の力なり。南屏に在

りて第一座に居り、忽ち澱湖にて公選の寵有り。二年にして復た双徑に勝集し、仍りて第一座に歸し、羣心歛如たり。今朝命を領じて、遐く禾興の光孝に赴く。岐に臨んで聊か教語を攄べ、以て祖行に當つ。錘を卓するに地無く、空しく双眼を餘して乾坤を蓋う。鉄笛をば横に吹き、氣有りて雲夢沢を吞まず。煙波は渺渺として、蘭棹は依依たり、雪蘆霜葦は冷うして相宜しく、幾度か掲開して閑かに月に対す。鴛湖深き処、必ずしも絲を垂れず、長水江頭、錦鱗自ら得たり。岐に臨む句子、如何んが分付せん。風は飄飄として衣を吹き、水は冷冷として詩を声ぶ。

咸淳戊辰秋九月、虚堂老僧、不動軒に書す。是の年、八十四なり。

この法語によれば、宝祐四年（一二五六）四月一九日に慧明が明州鄞県東五〇里の阿育王山広利禪寺に住持すると、慧明は智慧に随侍することとなり、さらに慧明が世の讒言を受けて時の宰相吳潜（字は毅夫、号は履齋、一一九六一—一二二二）によつて住持の座を追われて東山に隠閑した際にも同行し、智慧のもつとも不遇な時期をともに生きていくことが知られる。東山については明州鄞県東南四〇里の東山慧福禪寺のことなのか、越州（紹興府）上虞県西南五四里の東山（謝安山）国慶禪院のことなのか定かでないが、慧明は辛い立場の智慧に支えとなつて随侍しつづけたものらしい。智慧の忠告をあえて斥けて靈隠寺の普済のもとで『五燈会元』を編集した慧明が、やがてその智慧に随順するのは誠に奇しき因縁といつてよく、智慧が杭州钱塘県の南屏山淨慈報恩光孝寺に住するや、慧明は首座に迎えられる。

松源派の石林行鞏はすでに触れたごとく慧明と同じく滅翁文礼の法を嗣いでおり、景定五年（一二六四）三月三日に安吉州（湖州）帰安県の府城東南三五里の思溪法宝資福禪寺（もと円覚禪院）に住持しているが、成實堂文庫に所蔵される元版『石林和尚語録』巻上「思溪法宝資福禪寺語録」によれば、

謝雪蓬明首座。上堂。大衆、握龜毛筆、攪翻積翠、余波西湖、更無_二行路_一。拈兔角杖、穿_二鑿臨濟_一、大樹頑石、不_二敢点頭_一。鎔_二尺規模_一、裂_二破今古_一。且道、是什麼人分上事。夜寒回_レ首清茗外、万頃蘆花雪一蓬。

という上堂が存し、その後しばらくした上堂に「理宗皇帝昇遐上堂」が収められている。昇遐とは崩御のことであり、理宗（趙昀、初名は貴誠、一二〇五—一二六四、在位は一二二四—一二六四）が崩御したのは景定五年一〇月であるから、それ以前に慧明は西湖南畔の淨慈寺の首座という肩書きで思溪法宝資福禪寺の行鞏のもとを訪ねていることが知られ、行鞏は慧明の出身地である苕溪と道号である雪蓬にちなんだことばを述べて首座の要職を称えている。いうまでもなく思溪の資福寺（古くは円覚禪院）といえは宋版大藏經の思溪藏をもつて名高く、印刷技術の優秀さで他を圧倒する技術

を備えていたことが知られている。ちなみに同じ『石林和尚語録』巻下「偈頌」には、

忠州陳安撫、廬州夏宣慰、委_レ慈侍者、印_二造五燈会_三、因説_レ偈寄_レ之。

鷲嶺寥寥照_二夜燈_一、非_レ明非_レ暗見非_レ親、千年令_レ焰一吹滅、白日青天兩箇人。

と記されており、おそらく思溪法寶福禪寺において僧俗の篤志によって慧明編集の宋版『五燈会元』が初版より一〇年余を経て再版刊行され、行鞏がこれに因んで偈頌を寄せている事実が知られる。忠州(四川省)の陳安撫と廬州(安徽省)の夏宣慰および実務を任せられた慈侍者がこの『五燈会元』の印造が行鞏にとって資福寺を訪れた同門の慧明の動向と無縁であつたとは見難い。

その後、慧明は再び浄慈寺の智愚のもとに戻つて首座の任に就いたものと見られるが、興味深いのは『虚堂和尚語録』巻一〇「仏事後録」に「侍者慧明(恵明)編」と記されていることであろう。しかもその冒頭には、

咸淳元年三月十一日、恭奉_二聖旨_一、宣入_二大内_一普説。先於_二几筵殿_一、遷_二理宗皇帝靈輿_一、入_二正殿_一。拈香語録、師不_レ許_二刊行_一。という注目すべき記載が存している。すでに述べたごとく景定五年一〇月に崩御した理宗の靈輿を遷す儀式が年を越えて咸淳元年(一二六五)三月一日になされているが、智愚はその儀式の導師を執り行うべく宮殿の内裏に赴き、正殿にて亡き理宗のために拈香している。このとき智愚は親しく首座の慧明を侍者として伴つて大内の几筵殿に赴いており、慧明も随侍して宮中に入内していることになろう。ただ、智愚が大内で拈香してなした普説は、智愚の意向で刊行することを許さなかつたとされるから、随侍した慧明が聴聞筆写した普説のことばの全文は日の目を見ることなく封印されたことになろう。⁽²⁶⁾

また「雪蓬明長老赴_二禾興光孝_一」の法語によれば、その後、慧明は浄慈寺における首座の職位を終え、一旦、智愚のもとを離れて松江府(江蘇省)の澱山普光王寺に開堂出世しているものらしい。『至元嘉禾志』巻四「山阜」の「松江府」には澱山について、

澱山、在_二府北六十里薛澱湖中_一。周回三百五十步、高三十丈。考証、山形四出如_レ鼈、上建_二浮図_一、下有_二龍洞_一、屹_二立湖中_一、亦落星浮玉之類。傍有_二小山_一、初年僅兩席許、久之浸長。寺僧築_レ亭、其上榜曰_二明極_一。

と記されており、同じく巻一〇「寺院」の「松江府」には山中の普光寺について、

普光寺、在_二府西北七十里薛澱湖_一。考証、寺在_二湖中山頂_一。宋建炎元年、請_二今額_一。

と簡略に記されている。また明の正徳七年（一五二二）に刊行された『松江府志』卷一八「寺觀上」によれば、

澗山禪寺、薛澗湖中山頂。宋建炎初建。紹興中、賜額普光王寺。元天曆中燬、郡人唐昱重建。国朝改今額。

と載せられている。澗山は松江府青浦県北六〇里（または西北七〇里）の薛澗湖の湖中にある小山であり、山頂に澗山普光王寺（澗山禪寺）が存したことが知られる。慧明が澗山寺に開堂出世したのは咸淳元年のことと見られるが、住持を勤めたのはわずか二年にすぎなかったとされる。慧明は咸淳元年から翌二年まで澗山寺の住持職を勤めたにすぎず、住持を辞して杭州餘杭県西北五〇里の徑山興聖万寿禪寺に赴き、再び智慧の席下に投じて首座に再任することになる。

『一帆風』の序文と嘉興府報恩光孝禪寺への入寺

おそらく慧明は淨慈寺で首座を勤めていた頃より日本僧の南浦紹明などとも積極的に交流を持っていたものと見られ、徑山においても紹明と再び集うことになったものらしい。『一帆風』の冒頭には、

日本明禪師、留大唐十年、山川勝処、遊覽殆遍。泊見知識、典賓于輦寺。原其所由、如善竊者、間不容髮、無端於凌霄峰頂、披認來踪。諸公雖巧為遮藏、畢竟片帆已在滄波之外。

咸淳三年冬、苕谿慧明題。

という慧明が記した序文ないし題語が載せられている。これによっても慧明が苕谿（苕溪）の出身であったことが確かめられ、咸淳三年（一二六七）の冬に紹明が日本に帰るために徑山を辞するのの際し、慧明は親しく『一帆風』に序文を題して餞別に添えている。慧明の序文を書き下してみれば、

日本の明禪師、大唐に留まること十年、山川の勝処、遊覽して殆ど遍し。知識に見えるに泊んで、賓を輦寺に典る。其の由る所を原ぬるに、善く竊む者の如く、間に髪を容れず、端無くも凌霄峰頂に於いて、披きて來踪を認む。諸公、巧みに遮の蔵を為すと雖も、畢竟して片帆は已に滄波の外に在り。

咸淳三年の冬、苕谿の慧明、題す。

といった具合にならう。紹明は住持の智慧のほか諸禪者より餞別の偈頌を得て後、最後に首座の慧明のもとに向いて序文を依頼したものであり、慧明もその申し出を快く受け入れて序文を撰し、去り行く紹明に書き与えているわけである。『一帆風』の原本はすでに現今に残されていないが、おそらく実際に智慧や慧明さらに諸禪者が寄せた頌軸には慧

明の直筆の序文が存し、また慧明の落款なども押されていたことであろう。この『一帆風』や先に示した無学祖元ゆかりの「送雲溪歌」の頌軸の原本がともに散逸していることが惜しまれてならない。

慧明は最初に紹明が日本からやって来て南宋（大唐）の地に一〇年も留まって多くの山水の勝境を遊覧し尽くしたことを称えている。ついで知識に見えて賓を輦寺に典つたというのは、紹明が虚堂智愚という一代の大善知識と巡り合うことができ、杭州の径山において六頭首の一つ知客（典賓）の要職を勤めたことを述べている。善く竊む者とは密かに仏法の大意を盗み取った者であるから、凌霄峰が存する径山において紹明が一気に仏法を究め、西来意を悟り尽くしたことを称えた表現であろう。最後に慧明は諸禪者が紹明の帰国を送る偈頌を寄せているが、すでにその船の帆は遙か遠く海上にあると結んでいる。

咸淳四年（一二六八）秋九月に慧明はかつて智愚も住したことのある嘉興府嘉禾の天寧報恩光孝禪寺に住持することになり、径山の智愚の席下を辞している。³⁰ 澗山寺などに住持した僅かな期間を除き、慧明はほぼ智愚の晩年を共に生きており、その活動はまさに智愚の法を嗣いだ高弟であったと見ても何ら不自然でない。³² 八四歳の智愚も山内の方丈である不動軒において先の「雪蓬明長老赴禾興光孝」の法語を書し、餞別として慧明に付与している。慧明が住持した天寧寺については、明の万曆二八年（一六〇〇）に刊行された『嘉興府志』卷四「寺觀」の「郡城」に、

天寧禪寺、在二郡治北一里。唐為施水庵。宋治平間、慕容殿丞請于朝、至熙寧元年、賜二名壽聖院。崇寧二年、賜二名天寧寺。政和六年、改二名天寧万壽院。紹興七年、改二名広孝院。十三年、改二光孝禪院、賜二田二千畝。洪武二十四年、定為二今額。内有二漢風閣・毘盧閣、後有二敝助墓・敝將軍井・宋徽宗御書。屏在二僧舍。

とあり、また清の光緒五年（一八七九）に刊行された『嘉興府志』卷一八「寺觀」の「秀水泉」に、

天寧禪寺、在二治北里許。漢嚴助宅也。旧為二施水庵。唐咸通中、改為二院。宋治平中、郡人慕容殿丞請于朝、更為二十方禪刹。熙寧元年、賜二名壽聖院。崇寧二年、賜二名天寧寺。政和六年、改二名天寧万壽院。殿西池上、建二臨清軒。紹興七年、改二名広孝院。十三年、以二孝宗誕二毓是地、改二報恩光孝禪院、賜二田二千畝。元至元初、為二天寧万壽禪寺。至正中、僧良念重修、又建二静淥軒于殿左。僧力金、建二深雪軒于殿右。

と記されており、寺の変遷沿革が知られる。これらによれば、天寧報恩光孝禪寺は嘉興府治（秀水泉）北一里に存した禪寺であり、流虹興聖禪寺とともに宋室ゆかりの禪寺として重きをなしていたものらしい。³³ 元代末期においても破庵派

の空海良念や大慧派の西白力金（万金、白庵、円通普濟禪師、一三二七—一三三三）などが住持として活躍したことが伝えられている。

慧明がいつまで天寧報恩光孝禪寺に住持したのかは定かでなく、その後、しばらく如何なる活動をなしていたのかも知られていない。『五燈会元』の編集を成し遂げた慧明は、その後、智愚のもとに久しく参じたことで辛うじてその事跡を辿ることができたわけである。智愚は咸淳五年（一二六九）一〇月七日に世寿八五歳で示寂して径山の天沢庵に葬られており、まもなく『虚堂和尚語録』の続編部分が法嗣の宝葉妙源（晋之、一二〇七—一二八〇）らを中心に編集刊行されているが、このとき慧明もその編纂事業に参画し、積極的に助縁をなしたものと見られる。

晩年の活動と石林行鞏

晩年の慧明が如何なる活動をなしたのかについては、残念ながら何ら記事が知られていない。ただ、わずかに『石林和尚語録』巻上「臨安府浄慈報恩光孝禪寺語録」の第一〇番目の上堂に、つぎのごとき説示が収められている。

謝_レ北院・友雲_二西堂_一上堂。南山水冷草枯、逢_二着_レ両箇老虎_一。一箇眼揺、飛_二雪之光_一、一箇威奮、出_二林之怒_一。都来力不_レ抵_レ双、只得_二退_レ身_三步_一。遂召_レ衆云、各自照顧。

この「謝_二北院・友雲_二西堂_一上堂」によれば、北院と友雲という_二禪者が杭州（臨安府）の浄慈寺において行鞏のもとで西堂の職に居して「両箇の老虎」と称されていたことが知られる。西堂とは他山の住職を勤めた者、他寺の前住のことであり、こうした尊宿が来山した際に、西の賓位に迎えて接化の任を助化願うわけである。この中で北院西堂については北院が道号であろうと見られるものの、如何なる禪者なのか事跡が定かでない。一方の友雲西堂については、一に大慧派の友雲宗整（一一〇八—一二八七）のことではないかとも見られるが、おそらく「一箇は眼揺れて、雪の光を飛ばす」とあるから、行鞏と同門に当たると慧明の字である友雲を指しているものと推測される。

この点については『禅林備用清規』の冒頭に至大四年（一三一）秋に編者である松源派の沢山弑威（一威・与威とも）が江州（江西省）廬山の東林太平興龍禪寺で書した自序において、

近者大川_一笑翁_二祖_一、唱_二道南北山_一、日用軌則、盛_二於当代_一。至元戊寅、依_二石林和尚於南屏_一、猶得_レ見_二其遺風餘烈_一。及_二友雲明西堂出_二所_レ藏抄本_一、究心訪問、編集成_レ帙、始此書之作、或以_二為_レ僧受_レ戒首_一之、或以_二住持入院_一首_レ之。壬午、依_二

覺菴先師於承天、朝夕扣問。

と記しており、同じく『禪林備用清規』卷六「送鉢位」においても、

大川和尚住浄慈、如レ此間排。東叟・石林二老祖住日、同首座上板頭、都寺下板頭。

と語っていることから、友雲明西堂が友雲宗鋈ではなく、明確に友雲慧明であったことが知られる。弑威は至元一五年（南宋の祥興元年、一二七八）に浄慈寺の行鞏のもとに投じて西堂の慧明から清規の情報を得ており、やがて松源派の覚庵夢真（小大慧）に参じて法を嗣いでいる。ちなみに東叟とは大慧派の東叟仲穎（一二七六）のことであり、行鞏より先に浄慈寺に住持している。

この記載が慧明に関する最後の記事であり、その後、慧明の事跡を伝える文献はいまのところ見出せない。時あたかも南宋滅亡の前後であり、慌ただしい中で蒙古の建てた元朝が中国全土を統一している。こうした南宋末元初の動乱の最中で慧明はその消息を絶つてことになる。法兄の行鞏は至元一七年（一二八〇）一月二六日に世寿六一歳で示寂しているが、このとき慧明は五五歳であったことになる。壬午の歳すなわち至元一九年（一二八二）に弑威は蘇州（江蘇省）呉県の承天能仁禪寺に赴いて松源派の覚庵夢真に参じているから、それまで浄慈寺で西堂の慧明と交流をつづけ、『禪林備用清規』の基になる情報を伝え受けていたものであるうか。

一方、この時期、慧明と同年の生まれであった無学祖元は、日本の鎌倉幕府の執権（平将軍）であった北条時宗（法光寺殿道果、一二五一―一二八四）の要請を受けて元の至元一六年（日本の弘安二年、一二七九）六月に明州（浙江省）鄞県の天童山景德寺の法兄環溪惟一（一二〇一―一二八〇）のもとを辞して日本に赴き、やがて時宗の帰依で鎌倉山ノ内の瑞鹿山興聖円覚禪寺の開山となっており、その門流は仏光派さらに夢窓派として日本五山叢林の一大動脈となっている。祖元は日本の弘安九年（元の至元三年、一二八六）九月三日に世寿六一歳の生涯を終えているが、このとき慧明は新たに始動した元朝禪林においていまだ健在であったのかも知れない。

おわりに

慧明は『五燈会元』の編集を企ててこれを遂行したわけであるが、その『五燈会元』は後世の中国禪林や日本禪林に大きな影響を及ぼした燈史として知られる。しかしながら、後世、実際の編者であった慧明の存在は何時しか忘れ去ら

れており、徳を大川普済に譲つたかたちで、歴史の彼方に消えていつている。

本稿ではそんな埋もれた慧明の断片的な事跡を掘り起こし、これを順次に辿っていくことで慧明の生涯の功績を一通りまとめたものである。史料的には物足りない感はあるが、従来、ほとんど注目されることのない禅者であるから、現段階での一応の成果といつてよい。

慧明と関わつた禅者としては、滅翁文礼・大川普済・東谷妙光・虚堂智愚・無学祖元・石林行鞏・沢山式成などが挙げられ、在俗の居士としても沈浄明や王禰らが存している。状況的に慧明は文礼の門下の同門に当たれる禅者や、普済の門下の禅者とも深い関わりが存したはずであり、また久しく智愚に随侍していることから、智愚の門下を代表する宝葉妙源や閑極法雲（間叟、一二一五—？）らとも縁が深かつたと見てよいであろう。嗣法問題については文礼の法嗣なのか智愚の法嗣なのか明確でないが、あるいは状況的に慧明が最初の師である文礼に対しても報恩を感じ、また最も久しく参随した智愚に対しても深い報恩を感じていたがために、自らの嗣承を明確にしなかつたのかも知れない。

一方、慧明は南宋禅者と関わつていたのみならず、南浦紹明ら入宋した日本僧とも道交を結んでいたのであり、日本禅林との関わりから知られる事跡として、日本に渡来した無学祖元ゆかりの「送_二雲溪_一歌」の頌軸と、南浦紹明ゆかりの『一帆風』にその序跋を残している。おそらく時期的には同じ頃に浄慈寺や径山の虚堂智愚のもとに集つていた松源派の無象静照（法海禅師、一二三四—一三〇六）や智愚の法を嗣いだ巨山志源その他の日本僧らも慧明と何らかの道交をなしていた可能性が高い。例えば曹洞宗永平下の寒巖義尹（法王長老、一二二七—一三〇〇）は本師の永平道元（仏法房、一二〇〇—一二五三）の語録を携えて再入宋し、咸淳元年三月に浄慈寺の智愚から『永平元禅师語録』の跋文を得ているが、その後も径山で智愚のもとに身を寄せていたようであるから、紹明の場合と同様、浄慈寺や径山で首座の慧明とかなりの接点が存したはずであろう。

慧明は宝祐元年（一二五三）に『五燈会元』を編集刊行しているが、その後も少なくとも南宋最末期までは健在であったことが知られる。おそらく南宋最末期から元代初頭にかけて動乱期を生き抜き、その後、若き頃の華々しい活動とは裏腹に、意図空しく生涯を終えているものと見られる。先の「送_二雲溪_一歌」の頌軸や『一帆風』の原本が残されていれば、慧明の直筆の序跋や落款なども目の当たりにし、慧明の直筆の墨蹟を仰ぎ見ることができたはずであり、原本の散逸が惜しまれてならない。

(1) 『禪籍志』二巻は泉南(大阪府)の仏在庵で聖僕義諦が中国撰述(若干ながら日本・朝鮮のものを含む)の主要な禪籍について分類して説明を加えて編集したものであり、正徳六年(一七一六)に刊行されている。もと元禄六年(一六九三)春に門人の義佐が原案を作成しており、これに義諦が推考を加えて二巻となしたものである。上巻に「単録禪要類」「把断公案類」「宗門全史類」「宗門略史類」「叢林礼範類」を、下巻に「禪教総史類」「宗門隨筆類」「禪教雑説類」「宗師註経類」「禪籍志拾遺」を収めている。名著普及会編『大日本仏教全書』第一巻「仏教書籍目録第一」に所収されて一般に知られる。なお、義諦にはほかに『天沢東胤録』一巻が伝えられている。

(2) 『咸淳臨安志』卷三六「山川十五」の「餘杭県」には、茗溪。祥符志云、闊七十六步(居民墳墓、今闊六十步)。秋冬深五尺、春夏深九尺。山海経云、天目山、一名二浮玉山、高遠閑深。茗溪出焉、在二於潜・臨安兩県界、東流百五十里。經二本県、又東流二十七里、而至二錢塘界、又東流六十二里二百步、入二安吉州德清県。耆老伝云、夾二岸多二茗花、每秋風飄散、水上如二飛雪、一然因名。又輿地志云、自二県之西、名二冷溪、蓋取二清冷之意、乘二舟至二此、輕若二凌虚。唐天授三年、敕二

雪蓬慧明の活動とその功績(佐藤)

錢塘・於潜・餘杭・臨安四県、租税綱運、徑取二道於此、公私便二之。每春日風生、輒水長數寸、土人号爲二尹公潮。俗伝、尹公有二異術、能叱二水成二潮。

と記されている。茗溪は川の名で茗水ともいい、西浙を流れて太湖に注ぐ川のことである。その源流は臨安県の天目山(浮玉山)より出て於潜県と臨安県の県境を東流して餘杭県を経て錢塘県との県境を東流し、さらに安吉州(湖州)の德清県に入つて太湖に注いでいる。川の兩岸に茗すなわち野性の豌豆が群生し、秋になると茗花が風に飛ばされて水上に雪が舞うようになることから、茗溪と称されるようになったとされる。おそらく慧明はこの茗溪に沿った地域の一角をその本貫としていたものと見られ、出身地に因む地名を序跋に自署していたものであろう。

(3) 曹洞宗宏智派の東陵永興(妙応光国慧海慈濟禪師、一二八五—一三六五)が撰した「仏光国師行状」にも「師諱祖元、字子元、号二無字一也。生二於大宋宝慶丙戌年一也。世家二慶元府鄞之翔鳳里東湖、俗姓許」と記されているから、やはり祖元が宝慶二年(一二二六)に明州慶元府鄞県の翔鳳里東湖に生まれ、俗姓が許氏であったことが知られる。

(4) 天台徳雲については明確ではないが、当時、著名な禪者の一人として台州天台県の天台山万年報恩光孝禪寺

に住持していた大慧派の太虚徳雲（大虚、一二〇〇—一二五〇）が知られている。ただ『物初贖語』卷二「太虚禅师塔銘」によれば、太虚徳雲は天台県の出身ではなく、越州（浙江省）山陰県梅市の宋氏の出身であり、しかも文礼に僅かに先んじて淳祐一〇年九月一日に天台山万年報恩光孝寺の現住のまま示寂しているから、ここにいる天台徳雲は太虚徳雲ではないことになる。

(5) 『天童寺志』卷八「表貽放」に晋陵（常州武进県）の尤焯（字は伯晦、号は木石、諡は莊定、一一九〇—一二七二）が撰した「天目禅师語録序」が収められており、文礼には『天目禅师語録』が編集刊行されたことが知られる。椎名宏雄『宋元版禅籍の研究』の「第四章、宋元版禅籍の民間流传」の「文淵閣書目」の箇所に「天目語録（一冊）」とあり、『文淵閣書目』卷一七「仏書」の「寒字号第一厨書目」に「天目語録」とあるのがおそらく『天目禅师語録』のことを指しているよう。

(6) 『大川和尚語録』（または『靈隠大川濟禅师語録』とも）には『五燈会元』編集に関するような記事は存しておらず、『物初贖語』卷二四「大川禅师行状」や『大川和尚語録』卷末「靈隠大川禅师行状」にも『五燈会元』のことは一切触れられていない。大慧派の物初大観（一二〇一—一二六八）が普済の行状を撰したのは『五燈会元』が刊行されて数年を経た宝祐四年（一二五六）正月のこと

であるから、『五燈会元』が普済の編集に成るのであれば、その功績を「大川禅师行状」に書き残していないのは如何にも不自然であろう。

(7) 東山建仁寺山内の両足院に所蔵される『五燈会元抄』は、仏光派（夢窓派祖）の夢窓疎石（木訥子、夢窓国師、一二七五—一三五二）の法を嗣いだ笑山周念（映山とも）がなした『五燈会元』の抄物として知られるが、そこにすでに雪蓬慧明に関する記事が載せられていることが緒方香州「禅宗史籍の註釈について—五灯会元抄を中心として—」（『禅学研究』第五九号）に紹介されている。中世の伝承であるだけに貴重な記事であろうが、現在のところ、閲覧する機会に恵まれていない。

(8) 椎名宏雄「宋元版禅籍研究（二）—『五燈会元』—」（『印度学仏教学研究』第二五卷第一号、昭和五二年一月）に宋版と元版の『五燈会元』に関する考察が存する。また椎名宏雄『宋元版禅籍の研究』（大東出版社刊）の「第四章、宋元版禅籍の民間流传」の「第三節、清代の書目と宋元版禅籍」によれば、「荳圃善本書目」の箇所に、
五燈会元 二十卷 宋釈慧明撰。宋宝祐元年刊本。二十冊。

とあり、中華民国期の蔵書家である張乃熊（字は荳圃）が撰述した『荳圃善本書目』に宋版『五燈会元』が慧明撰として所蔵されていることを記している。また椎名氏

はその該当の『五燈会元』が台北の故宮博物院に伝存していることを記している。一方、別に北京市の中華書局から「中国仏教典籍選刊」の一つとして蘇淵雷点校『五燈会元』三冊が一九八四年一〇月に活字出版されている。これは上海市（滬の上坊間）の一隅から発見された宋宝祐本（宋版）を底本としており、貴重な成果であるが、やはり「宋」普濟著」として扱われている。

(9) 『靈隱寺志』(『武林靈隱寺志』とも) 卷二「梵宇」には「方丈直指堂。高六丈七尺、癸卯年十一月十日建」と記されており、ここにいう癸卯の年とは康熙二年（一六六三）と見られ、このとき再建されているものらしいが、靈隱寺の方丈が直指堂と称されていたことが知られる。この点は『扶桑五山記』一「大宋国諸寺位次」の「第二、杭州臨安府北山景德靈隱禪寺」の項にも「直指堂」とあるから、古くより靈隱寺では方丈を直指堂と称していたことが窺われる。

(10) 王楠（通庵居士）については、『大川和尚語録』「跋」に「通庵居士頌^二維摩經^一」が収められており、『偃溪和尚語録』卷下「題跋」にも「跋^二通菴王太尉維摩經頌^一」が存しているから、大慧派の大川普濟や偃溪広聞と交遊が存した世俗の居士で『維摩經頌』を著したことが知られるが、詳しい事跡などは定かでない。

(11) 『虚堂和尚語録』卷一〇「虚堂和尚新添」の「答^二蓬萊宣

長老^一書」に「光老恐三月初進院。移^レ单帰^二松源塔所^一去」という記事が存しており、このとき智愚は東谷妙光が宝祐元年（一二五三）三月初めに靈隱寺に住山することを書簡で法嗣の無爾可宣（無示・無尔）に伝え、松源塔所すなわち鷲峰庵に来るように促している。また『虚堂和尚語録』卷四「靈隱立僧普説」は智愚が靈隱寺の妙光に招かれて夏安居に立僧した際の普説にほかならない。

(12) 『大川和尚語録』「住臨安府景德靈隱禪寺語録」の「謝^二首座藏主^一上堂」において大川普濟は「堂中首座人天眼、漢語胡言大藏經、七百衲僧吞^二仏祖^一、靈山衆得做^二閑人^一」と述べており、同じく「小参」の末尾に載る「結夏」の小参でも「北山今日、七百比丘、同^二此結夏^一」と述べているから、当時、靈隱寺（北山）には七〇〇人ももの修行僧が参集していたことが知られる。

(13) 沈浄明については、『大川和尚語録』「偈頌」に「示^二円鑑沈浄明^一」が収められており、やはり普濟に参禅していた居士であろうと見られる。浄明がこの人の諱とすれば、円鑑は字か居士号ということになる。

(14) 業海子清（了清）については『増集続伝燈録』卷四「越州天衣業海了清禪師」の章があり、大慧派の晦機元照の法を嗣いだことが知られるが、伝記的な記載が見られない。用章廷俊は笑隱大新の法嗣であるから、元照の法孫に当たっており、廷俊は自らの文集である『泊川集』「疏」

においても「重刊五燈会元化疏」を残している。

- (15) 曹洞宗の万松行秀（報恩老人、一一六六—一二四六）は北地にて『祖燈録』六二巻を編集し、鄱陽（江西省）于越亭の雲壑□瑞は江南にて『至元心燈録』を編集しているが、いずれも流布せずに現今に残されていない。これらに比すれば、自ずと『五燈会元』の与えた影響が如何に大きかったかが偲ばれ、编者慧明の熱意と目立たぬ活動が一段と惜しまれてならない。

- (16) 『仏光国師語録』巻九「拾遺雜録」の「跋」によれば、祖元の「送雲溪歌」とは、

送雲溪歌并序。諸老題跋附。

己酉上元夕、僕与雲溪客長安、過蘇堤直北坂一者数里、倚而歌、歌而止、終則愴焉以悲。噫、星月在空、燈火如昼、今夕何夕、奈此離別。又未可知、何夕復見子於何地。其所成立者、又如何哉。命騷以送之之行。

梧桐生兮高岡、鳴鳳鸞兮朝陽、哀吾生兮誕虺。猗若人兮珪璋、故山兮瑤艸芳、鞭螭兮絶大江。大江兮天長、望之子兮歌吉祥。安熙熙兮樂康、朝濯纓兮滄浪、折若木兮扶桑、潔爾佩兮穆芳。夕弭節兮望八荒、繫日星兮煌煌、覽物化兮蒼黃。肅肅兮自將、德音兮予所望。嗟人生之幾何兮、毋消搖以相羊。

というものであり、祖元が己酉の上元すなわち淳祐九年（一二四九）の春に友人の雲溪と杭州西湖の蘇堤に遊び、別れに臨んで詠じた詩偈である。『仏光国師語録』巻二「台州真如禅寺語録二」の「往来偈頌」にも、

与雲溪一夜話有作。

揣剥家私、徹骨貧、一絲一線不共存、通玄峯頂無人到、雨滴巖花襯冷雲。

という偈頌が収められているから、両者の道交はその後も祖元が来日する前までつづいたものらしい。通玄峯は台州天台県北五〇里に存する天台山の一峰であり、かつて法眼宗の天台徳韶（恵舟、韶国師、八九一—一九七二）が卓庵した地として知られる。

- (17) 『増集続伝燈録』巻五に「杭州浄慈古田屋禅師」の章が存しており、『仏祖正伝宗派図』『仏祖宗派図』には「浄慈断橋妙倫」の法嗣として「浄慈古田徳屋」と記されている。徳屋は元の至元二九年（一二九二）四月一四日に杭州浄慈寺の方丈で示寂しており、世寿は知られていないものの、おそらく年齢的には慧明や祖元と同世代であったものと推測される。

- (18) 虞集は「送雲溪歌」の題跋の末尾において、断江恩公所、藏子元送雲溪、楚辞一章、今七十年矣。随而題之者廿二人、韓君之外、皆方外名勝師表。盖有切切偲偲之儀焉。孰謂、天倫可泯也。楚人之辞、

大抵悲苦沈鬱。今也參_二錯孔翠之萃菜_一、離_二合椒蘭之芬芳_一、別有_二清越之趣_一、故非_二塵俗所_レ可_レ能也。虞集題。と述べていることから、祖元の「送_二雲溪_一歌」が辿った七〇年間に及ぶあとかたを窺うことができる。祖元の「送_二雲溪_一歌」とこれに題跋を寄せた長軸は、その後、慧明と同門に当たる松源派の横川如珙（行珙とも、此庵、一一二二—一一二八九）の法を嗣いだ断江覚恩が所持していたことが知られるが、覚恩自身の題跋などは収められていない。この頌軸に虞集が題跋を付するに至った経緯は定かでないが、おそらく覚恩が虞集とも方外の交わりをなしていることから、虞集が元の延祐年間（一一三一—一一三二〇）の頃に巻尾に題跋を寄せることになったものである。その後、元代末期に入元した仏光派の禪者が縁あつて祖元ゆかりの「送_二雲溪_一歌」の頌軸を入手し、これを日本禅林に将来しているものと見られる。「送_二雲溪_一歌」の原本はすでに失われたもののようにあるが、辛うじて文面のみが『仏光国師語録』に収録されたことで現今に残されたわけである。

(19) 「送_二雲溪_一歌」に題跋を寄せた禪者や俗人としては、善如假管・忝友円良・巖隠師・妙高（雲峰妙高か）・永嘉愚慶子懐・茗溪慧明・天台徳垢・越炳同、愚溪如幻・三山徳清・蜀宗清・池陽永訥・伯元以善・虚中甫・即一・梅橋元純・淮東以佑・東川妙明晦中・韓巽甫・似藻（南

雪蓬慧明の活動とその功績（佐藤）

洞似藻か）・法綱（雪磯法綱か）・慈溪居簡・虞集が存している。祖元が「送_二雲溪_一歌」を詠じたのは淳祐九年（一二四九）のことであり、題跋の年時が明確なものとしては破庵派（無準下）の断橋妙倫の法を嗣いだ古田徳屋が宝祐四年（一二五六）中秋に、大慧派の大川普済の法を嗣いだ野翁炳同（少竺、一一二二—一一三〇二）が開慶元年（一二五九）暮春三月晦日に、如幻が同じ頃に、徳清が開慶元年の浴仏日（四月八日）に、破庵派（無準下）の西巖了慧の法を嗣いだ混溪宗清（義天）が景定元年（一二六〇）の菊節（九月九日）に、永訥が同じく景定元年菊節に、元純が景定四年（一二六三）春に、それぞれ題跋を寄せている。また韓巽甫が元の大徳一一年（一二三〇七）に至って題跋を記しており、末尾には虞集が題跋を寄せている。

(20) 『増集続伝燈録』巻四「目錄」には「天童天目礼禪師法嗣」として「育王横川如珙禪師」「浄慈石林行鞏禪師」「天寧水谷衍禪師」「虎丘雲岍靖禪師」「翠巖守真禪師（此後無_レ伝）」「月庭華禪師」という六人の名を挙げており、実際に「四明育王横川如珙禪師」「杭州浄慈石林行鞏禪師」「嘉興天寧水谷衍禪師」「蘇州虎丘雲岍靖禪師」の四人の章を載せている。

(21) 『元亨釈書』巻八「浄禅三之三」の「釈祖元」の章では、後寓_二飛来_一、時愚虚堂棲_二鷲峰菴_一、元常往来。一日堂

示_レ「禅海波瀾」、元溟_二淳然_一。適_レ石帆・石林・横川三名柄、之_二天台_一。堂以_レ偈送_レ之、有_レ「相送当_レ門有_二脩竹_一、為_レ君葉葉起_二清風_一」之句。元入来、堂举_二示元_一。元曰、和尚此頌、只是閑語、中間無_レ些_二子巴鼻_一。堂拈_二起頌子_一曰、這箇響_一。元欲_二進語_一。堂劈面一揮。元自_レ是得_二句語_一三味。

と記されており、『仏光国師語録』の「告香普説」とは相違した内容となっている。この記述によれば、行鞏や如珙とともに班を組んで天台山に赴いた衍禅徳を智愚の法弟に当たる石帆惟衍（？—一二七二）と解していたことになるが、この説は明らかな誤りである。

(22) この点については、拙稿「天童山の石帆惟衍について—虚堂智愚・西澗子曇および北条時宗と関わった南宋末期の臨済禅者—」（『駒澤大学仏教学部研究紀要』第六六号）を参照。

(23) 『虚堂録犁耕』卷二九「偈頌」の「雪蓬明長老」の項（禅文化研究所本、一一六四頁）には、

前六偈頌（廿二丈右）有_レ「明知客江心訪_二竺峯_一偈」。忠曰、竺峯、靈隱北高峯也。虚堂退_二宝林_一、帰_二松源塔_一、下_一（靈隱）、在_二七十歳前後_一。而此法語、咸淳四年作、師八十四歳也。見_二前偈_一、有_レ「勸励語」（構林句子千鈞重、江上帰来記得無）。今云、此老之力也。実与_二宝祐初_一相距十五年、其語異_レ前不_レ可_レ怪。

旧解曰、雪篷、諱慧明、嗣_二虚堂_一、住_二天寧_一。忠曰、旧解、蓋唐人伝来之説、又蓬作_レ篷。尤是蓬恐訛。細字古刊、亦作_レ蓬非也。増集伝燈及正誤宗派、虚堂下_レ載_二雪篷_一。

と記されている。『虚堂和尚語録』卷七「偈頌」に「明知客江心訪_二竺峯_一」の偈頌が存しているが、『虚堂録犁耕』ではこの竺峯（靈隱寺）を訪れた明知客を慧明のことと解している。この説が成り立つとすれば、慧明が文礼のもとを離れて靈隱寺の普済に参学するまでの間、温州永嘉県の江心山龍翔寺に掛搭して知客の職を勤めていたことになり、その後、靈隱寺に上山した際、鷲峰庵の智愚を来訪したと解さなければならない。智愚が宝林寺（構林）を退いて鷲峰庵に閑居してまもない淳祐九年（一二四九）の頃に詠じた偈頌ということになるうか。

(24) 径山の不動軒については『径山志』卷一一「殿宇」に、不動軒。馮公幟問_二道大慧_一、結_二室于此_一、号_二不動居士_一、故名。今廢。

とあるから、不動軒は南宋初期の大慧宗杲に参じた數文閣直学士の馮幟（字は済川、不動居士、？—一一五二）が結んだ居室であるが、後に廢絶したとされる。『虚堂和尚語録』卷一〇「新添」に載る「送_二日本南浦知客_一」の偈頌にも「咸淳丁卯秋、住_二大唐径山_一、智愚、書_二于不動軒_一」とあるから、同じく不動軒で書されていること

が知られる。

(25) 南宋末期から元代初頭にかけて活躍した石林行鞏の『石林和尚語録』二巻は、唯一の元版がお茶の水図書館の成實堂文庫に所蔵されている。全巻翻刻が認められていないため、ここでは成實堂文庫で全巻筆写した元版『石林和尚語録』に基づいて内容を取り上げるものである。詳しくは拙稿「石林行鞏の活動と『石林和尚語録』について(上)」―南宋末元初に活躍した臨済宗松源派の禅匠を顕彰する―(『駒澤大学禅研究所年報』第一九号)を参照。

(26) 『虚堂和尚語録』巻一〇「仏事後録」には、

咸淳元年三月十一日、恭奉_二聖旨_一、宣入_二大内_一普説。
先於_二几筵殿_一、遷_二理宗皇帝靈輦_一、入_二正殿_一。拈香語
録、師不_レ許_二刊行_一。

安_レ孝垂_レ慈契_二宿薰_一、鸞輿宮殿出_二金門_一、乾坤日月無_二光彩_一、草木咸霑旧日恩。恭惟、烈文仁武安孝皇帝、龍鳳之姿、天日之表、堯仁舜德、濟_レ世沢_レ民。垂衣端拱、四十一年、顕_レ道継_レ明、一十三葉。時康物阜、天清地寧、十方国土、果円一徑。西天路活、千花捧_レ足、百宝蔽_レ身、空中仙菓、来迎大地、六種震動。今也次第、攀_二蓮蔽駕_一、奉_二重春行_一、一句無私。如何話会。深炷_二紫檀_一、樓閣現、百千諸仏共遨遊。

とあり、理宗のために智愚が拈香になした法語の一部と見られる内容を載せている。この文を抜粋して筆録した

雪蓬慧明の活動とその功績(佐藤)

のが慧明であり、おそらく『虚堂和尚語録』の後録が編纂される際、生前に刊行を許さなかった理宗に対する拈香法語を智愚の示寂して後、慧明が部分的に提供したものであろう。

(27) 大慧派の淮海元肇(原肇とも、一一八九―一二六五)の『淮海外集』巻下に「嘉興府澗山普光王禅寺免丁田記」が収められており、また径山で智愚にも参学した経験が存する楊岐派の蒙山德異(古筠比丘、一二三二―?)も元初に澗山寺に住持し、その後、蘇州呉県の休休禅庵に居住しており、至元二三年(一二八六)の燈節(正月)に『仏祖三経』に序を寄せ、至元二七年(一二九〇)中春二月には徳異本『六祖壇経』を編している。さらに『月江和尚語録』巻上に「月江和尚住松江澗山禅寺語録」と「月江和尚再住澗山禅寺語録」が収められているから、元代に松源派の月江正印(松月翁・仏心普鑑禅師、一二六七―?)も二度にわたり澗山寺に住持していることが知られる。また大慧派の竺田汝霖(如霖、一二七四―一三三九)も一〇余年にわたって澗山寺に住持し、仏殿や衆寮など伽藍を一新している。

(28) 正徳七年刊『松江府志』巻一七「寺観上」の「澗山禅寺」の項には、紹興一八年(一一五八)七月に翰林学士の莫儔(字は寿朋、真一居士、一〇八九―一一六四)が記した「建塔記」と咸淳五年(一二六九)四月八日に朝散郎

の顔汝勲が撰した「鑄鐘記」と、元代後期に慶元路（明州）の阿育王山広利禪寺の前住として松原派の月江正印が撰した「重建仏殿記」が収められており、また松原派の断江覚恩が詠じた「寺前即事」の詩偈も載せられている。注目すべきは咸淳五年に澗山寺の「建塔記」を記した顔汝勲（一斎居士）が松原派の無明慧性（慧性、一一六〇—一二三七）に参じて印可を得た居士であり、日本に渡来して鎌倉建長寺の開山となった蘭溪道隆（大覚禪師、一二一三—一二七八）と同門に当たっていることであろう。顔汝勲は『無明和尚語録』の刊行に尽力するとともに、本師慧性の「塔銘」も撰している。一方、成實堂文庫所蔵『石林和尚語録』の末尾には、同じ顔汝勲が石林行鞏のために撰した「行状」がおさめられており、慧性の示寂した後、顔汝勲が法系上の従弟に当たる行鞏と道交を結んでいたことが判明する。顔汝勲が澗山寺の「建塔記」を撰したのは慧明が澗山寺の住持を退いて間もない頃であり、後に浄慈寺の行鞏のもとで西堂を勤めた際も、慧明は法兄の行鞏とともに老齡の顔汝勲に親しく接していたのではないかと推測される。

- (29) 『一帆風』については、玉村竹二『五山文学新集』別巻一の「詩軸集成」に所収され、諸本の解題がなされている。
- (30) 南浦紹明の在宋中の動静については、拙稿「虚堂智愚と南浦紹明—日本僧紹明の在宋中の動静について—」（花

園大学『禅文化研究所紀要（加藤正俊先生喜寿記念論集）』第二八号）を参照されたい。

- (31) 『虚堂和尚語録』巻九「臨安府径山興聖万寿禅寺後録」に「嘉禾報恩冰谷遺書至上堂」が存し、また『石林和尚語録』巻下「偈頌」に「水谷法兄、戊辰示寂于嘉禾天寧。丁丑夏五月、舟次俯仰陳述、感慨成偈」と題する偈頌が残されているから、慧明は咸淳四年夏に示寂した同門の水谷衍の後席を継ぐかたちで嘉興府の天寧報恩光孝寺に入寺していることが判明する。

- (32) ちなみに戦国期に活動した大応派（妙心寺派）の景聡興勳（一四七六—？）は『虚堂録假名鈔』（単に『虚堂録抄』とも）巻一〇「法語」の「雪蓬」において、

雪一八号、諱ハ恵明、嗣虚堂、住天寧也。禾興ノ光孝ハ、嘉興府報恩光孝寺也。虚堂モ、自嘉興府興聖寺、移嘉興府ノ報恩光孝寺也。

と記しており、江戸中期の学僧として名高い同じ大応派（妙心寺派）の無著道忠（照冰堂、葆雨堂、一六五三—一七四四）も『虚堂録犁耕』巻二九「法語」の「雪蓬明長老」において、

雪蓬明長老。前六偈頌（廿二丈右）有_下明知客江心訪_二竺峯_一偈。忠曰、竺峯、靈隱北高峯也。虚堂退_二宝林_一、帰_二松源塔下_一（靈隱）、在_二七十歳前後_一。而此法語、咸淳四年作、師八十四歳也。見_二前偈_一、有_二勸励語_一（構

林句子千鈞重、江上帰來記得無、今云、此老之力也。実与「宝祐初」相距十五年、其語異「前不」可怪。旧解曰、雪篷、諱慧明、嗣「虚堂」、住「天寧」。忠曰、旧解蓋唐人伝來之説、又蓬作「篷」、尤是蓬恐訛。細字古刊亦作「蓬非也」。増続伝燈及正誤宗派、虚堂下不載「雪篷」。

と慧明について註を付している。これらは何れも慧明（恵明）を智愚の法嗣とする立場に立っているが、道忠は『正誤宗派図』の記事との違いを知っていたものであるう。

(33) 『癡絶和尚語録』卷上「癡絶和尚住嘉興府報恩光孝禪寺語録」に「師於「嘉定己卯五月二十日」入院」とあり、卷末「徑山癡絶禪師行状」にも「嘉定己卯、由「徑山」応「嘉興光孝請」、一薊為「曹源」、修「末後供」。宝慶乙酉、被「堂帖」移「蒋山」と記されている。おそらく報恩光孝寺の住持は癡絶道冲から別浦法舟さらに虚堂智愚へと継承されたものであろう。その後、嘉興府の天寧報恩光孝寺に住した禪者としては、松源派では慧明と同門で智愚にも参じたこともある水谷衍のほか、やはり慧明と同門に当たる石林行鞏に法を嗣いだ竺雲景曇がおり、破庵派では方山文宝の法嗣である鏡堂思古といった禪者が存している。また大慧派では楚石梵琦（西齋老人、仏日普照慧辯禪師、一二九六—一三七〇）が住持して元代末期に多くの日本僧がその会下に来参したことは名高い。

雪篷慧明の活動とその功績（佐藤）

(34) 大慧派の友雲宗鑑については、破庵派（幻住派）の天如惟則（仏心普濟文慧大辯禪師、一二八六—一三五四）が撰した「龍濟禪寺友雲禪師塔銘」が『師子林天如和尚語録』卷六「銘」に収められており、比較的詳しい事跡が知られる。宗鑑は大慧派の妙峰之善（一一五二—一二三五）の法を嗣いだことが知られるが、浄慈寺の行鞏よりかなり年長であり、ここにいう友雲明西堂とは全くの別人と見てよい。

【雪蓬慧明関連系譜】

